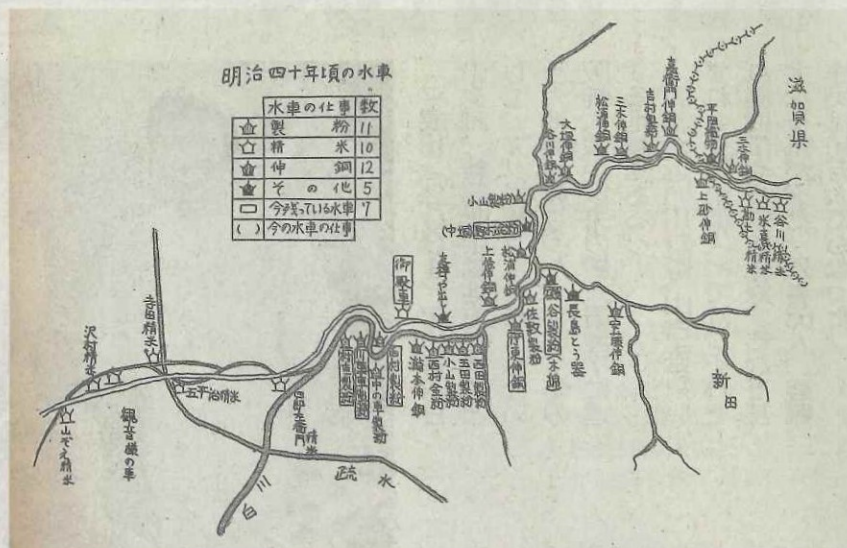


地域の生きた証言、今も輝き

「北白川こども風土記」来年刊行60年

北白川小(京都市左京区)の児童たちが地域の歴史をまとめた異色の郷土史「北白川こども風土記」が出版されて、来年で60年になる。子どもたちが地元を歩き、古き話を聞いて調べ上げた成果は、近くにある京都大の支援もあって充実した内容になり、故梅棹忠夫氏は絶賛した。その輝きは半世紀以上たった今なお失われてはいない。

(榊山聡)



明治四十年頃の水車

| 水車の仕事 | 数 |
|----------|----|
| 製粉 | 11 |
| 精米 | 10 |
| 神代 | 12 |
| その他 | 5 |
| 今残っている水車 | 7 |
| 今の水車の仕事 | |

8月末の炎天下、京阪祇園四条駅前に集合した約10人が路線バスに乗り込んだ。一行が向かったのは京都府と滋賀県の県境の白川街道。「北白川こども風土記」に登場する「重ね石を訪ねるツアー」で、美術家の谷本研さん(44)と大津市と中村裕太さん(35)と中京区IIが企画した。「北白川こども風土記」に導かれた2人は2年前、「昔の山中越えを追体験したい」とポニーを連れて歩いた経験がある。

重ね石は「風土記」の「白川街道を歩いて」と題した文で紹介されている。それによれば、5軒余りの大きな岩に同じぐらいの大きさの岩が乗っており、上の岩に地蔵が四つ彫られている。この地蔵は昔、京都と滋賀の人がこの岩の取り合いでけんかとなり、地蔵を彫ってまつことで収めたため、「せりあいじょう」と呼ばれるようになったと地元住民の話として記されている。鎌倉時代のものとされ、以前は地蔵盆の時ににぎわったとの聞き取りが書かれている。

バスに揺られて25分。バス停「山中」に着き、道路から眼下の白川沿いに続く急な階段を下りると「重ね石」が現れた。近くの木々は数年前の

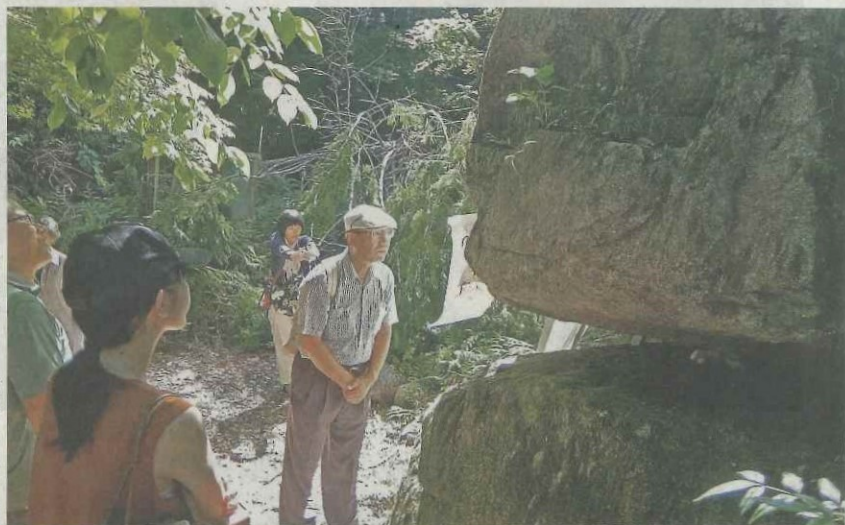
消えた歴史、子ども目線で記録
来春、文博で資料展示



①「北白川こども風土記」に掲載された明治40年頃の水車の分布
②「北白川こども風土記」には、子どもたちの版画も挿絵として掲載されている

「北白川こども風土記」には、子どもたちの版画も挿絵として掲載されている

消えた歴史、子ども目線で記録 来春、文博で資料展示



白川街道の「重ね石」。「北白川こども風土記」に登場して半世紀以上がたち、倒木に囲まれて人知れずひっそりと残っていた(大津市)

台風に倒されたままといひ、「風土記」に登場する向かいの民家も空き家のよう。刊行後の時の経過を感じさせられた。

一行は再び道路に戻り、白川に沿って山中町を散策した。道はたの所々に石燈籠などが置かれていた。「北白川」にはかつて白川石を使った石屋も多くありました。谷本さんが話した。

「風土記」には地域の産業も生きた証言を交えて詳しく紹介されている。「水車の時代はもうこない」と題した文章は、水車で製粉業を代々営む家の女兒が父親から聞いた話を基に、白川の水を利用した水車が往時には38軒あったと記している。現在の風景から当時の様子を思い浮かべるのは難しいだけに「風土記」は貴重な時代の証言と言えるだろう。参加したある女性は一北白川にこんなに豊かな歴史があると知らなかった」と話した。

戦後教育の中で身近な郷土を対象にした実践学習が全国の学校で展開され、1960年までに各地でさまざまな「こども風土記」が刊行された。「その流れの中で『北白川こども風土記』は、ピクと言え作品」と京都大人文科学研究所の菊地晴助教(日本民俗学)は話す。「子どもならではの目線で地域の厚みがきめ細かく記録されている。北

北白川こども風土記 北白川小4年生の48人が3年間で調べ、1959年にまとめた。「大文字の送り水」「郷土の遺跡」など全8章で、A5判374ページに及ぶ。地元山口書店から出版された。国立民族学博物館の初代館長を務めた梅棹忠夫氏は当時の書評で「これはおどろくべき本である。子どもというものが、よい指導をえた場合にはどれほどりっぱな仕事をする事ができるか、ということをしめすみことな見本である」と評価した。映画化もされた。

白川には昔から桓武天皇の御陵だと信じられた賀茂社があったが、それが政府に知られると周囲の田畑や宅地が退かなければならなくなるため、村人たちが話し合って鳥居を壊し、賀茂社を「天神さん」(北白川天神宮境内)に移したという証言がある。「歴史意識の形成を考える上でも興味深い事例を拾い上げている」

「風土記」の成立には京大という知的機関の存在も大きく影響した。京大人文研究所長だった森鹿三氏が序文を寄せ、執筆した児童の父親が京大の研究者という場合もある。「もともと歴史深い地域に土着の農家らと新来の学者や会社員が併存する当時の環境で生まれた」

児童の指導にあたった北白川小の故大山徳夫教諭は刊行後の対談である不満を口にした。郷土を学ぶことで地域の課題の改善を図る主体をなくくむ狙いが、郷土自慢にとどまったというのだ。菊地助教は「北白川こども風土記の試みは、郷土を知ることと郷土を愛することが直線的に結びつけられがちな現代でも未完の課題として引き継がれている」と指摘する。

北白川に残る「風土記」の原稿などといった資料の一部は、来年3月に京都文化博物館(中京区)である府内学校資料の展示で紹介される。刊行から節目の年に、あらためて見直される機会になりそうだ。

松田美緒さんのデュオが京都公演

26日 サンバ・ジャズの初アルバム披露

京都を拠点に「旅する歌手」として国内外で活躍する松田美緒さんと米ニューヨーク在住のサンバ・ジャズ・ピアニストMIKAさんのブラジル音楽デュオ「QUATRO M」のライブが26日、京都市中京区のライブスポットRAGで行われる。

初アルバム「Primeiro Passo」=写真=の発売記念ツアーの一環。サンバ・ジャズ黄金期の洗練や古いサンバ・カンソンの情感をボーカルとピアノで豊かに表現する。

午後7時半開演。3500円(飲食代別)。ラグ075(255)7273。



QUATRO M

Primeiro Passo